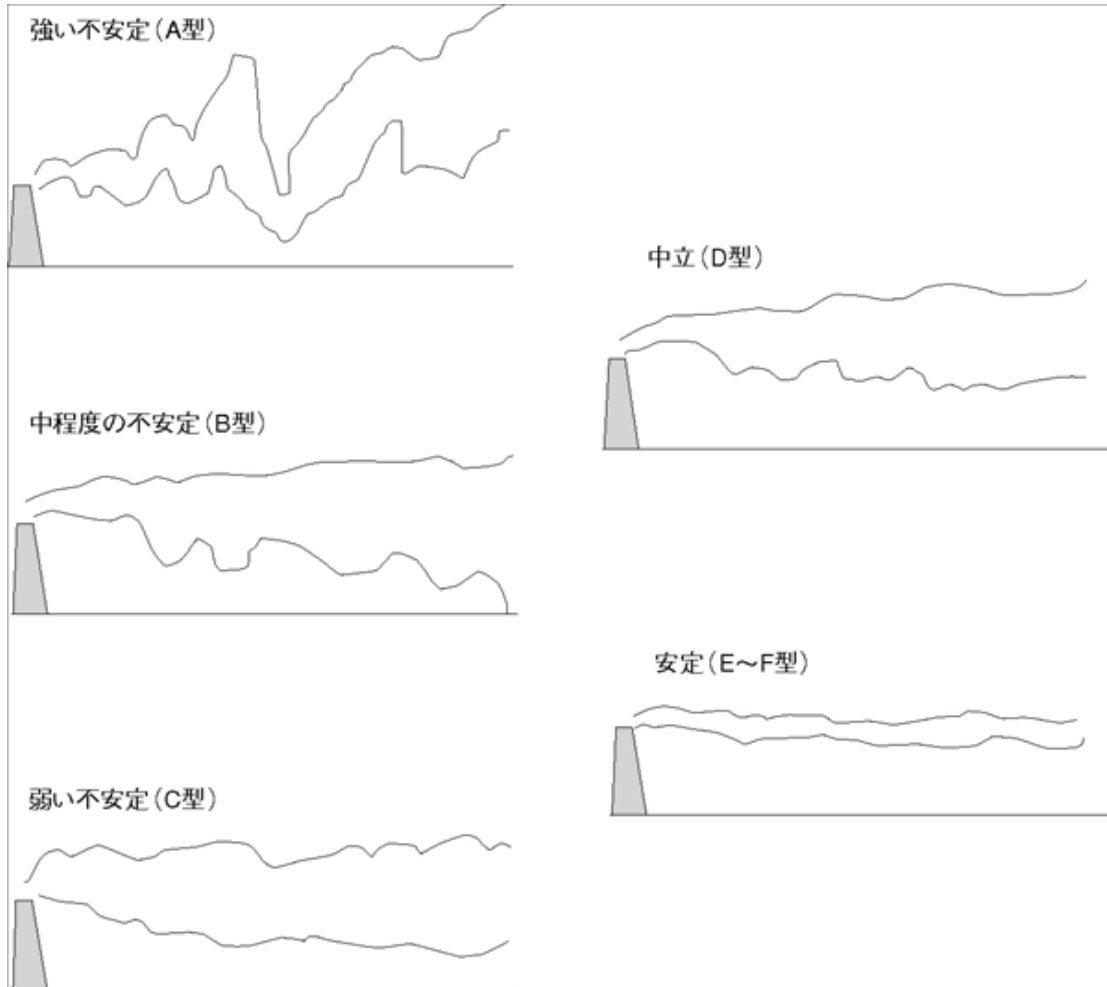


資料1-1 大気安定度ごとの煙の拡散幅(イメージ)

下図は大気安定度ごとの煙の拡散幅のイメージです。
 拡散幅が広い(不安定時)ほど、瞬間的に、近くに高濃度が出やすくなります。
 そこで、予測条件は、大気安定度の不安定側条件(A~B)の起こりうる風速で予測し、地上濃度が最大となった条件(大気安定度A、風速1.5m/s)の結果を準備書に記載しました。



出典: 原子力防災基礎用語集(文部科学省)

表4-23 ●原子力安全委員会によるPasquill安定度分類

風速(U) m/s	日射量(T) kW/m ²				放射収支量(Q) kW/m ²		
	T ≥ 0.60	0.60 > T ≥ 0.30	0.30 > T ≥ 0.15	0.15 > T	Q ≥ -0.020	-0.020 > Q ≥ -0.040	-0.040 > Q
U < 2	A	A-B	B	D	D	G	G
2 ≤ U < 3	A-B	B	C	D	D	E	F
3 ≤ U < 4	B	B-C	C	D	D	D	E
4 ≤ U < 6	C	C-D	D	D	D	D	D
6 ≤ U	C	D	D	D	D	D	D

出典 環境庁大気保全局大気規制課『窒素酸化物総量規制マニュアル』1995年

(準備書 p. 4-1-137)

表4-1-95 気象条件(大気安定度不安定時)

大気安定度	煙突頭頂部風速 (m/s)
A	0.4 (無風時)、0.7 (弱風時)、1.5 (有風時)
A-B	0.4 (無風時)、0.7 (弱風時)、1.5、2.5 (有風時)
B	0.4 (無風時)、0.7 (弱風時)、1.5、2.5、3.5 (有風時)